になりたいと思っている。

　バゼットは髪に触れてみた。赤毛で短くて、猫毛のように細く腰のない髪をしている。いままでバゼットは髪のことなど気にしたことはなく、仕事の邪魔になるからと短く切りつめ、伸ばした経験はなかった。髪を染めたり形を変えて、世の女性とおなじように洒落っ気を出すのは気持ちが緩(ゆる)むような気がして嫌いだったし、興味もわかないと思ってきた。

　しかし、ラウンジに座って笑っていた女性の髪を眺めてバゼットの心が逸(はや)ったのは事実だ。いま思いかえしても胸が奇妙に高鳴ってしまう。言峰も、自分が感じているような高鳴りを感じてくれるだろうか。

　色を染めかえたところでちぐはぐな印象になってしまうのは目に見えている。それなら、とバゼットは髪をつまんで立ててみて、伸ばしてみたらどうだろうと考えた。せめて肩につくくらい長くなれば少しは大人っぽくなるかもしれない。しかしどんな印象になるのか皆目(かいもく)想像がつかず、バゼットはあちこちの髪をつまんでは色々な方向に引っ張り、鏡のなかの自分へ澄まして笑いかけてみた。

　忍び笑いが聞こえてきて、鏡を夢中で見つめていたバゼットは心臓が跳ねあがらんばかりに驚いた。見ると言峰がいつのまにか目を覚まし、こちらに身体を向けてさも可笑(おか)しそうな顔つきをしていた。

　頬が熱くなるのを感じながら、バゼットは恥ずかしさのあまり逃げ出したくなったが、どうしていいかわからず、髪をつまんだ手を下ろせなかった。いつもこうだ。言峰にはよりによって、いちばん見られたくない部分ばかりを目にされてしまう。

「いつから見ていたのですか」

「いつからだろうな」

　言峰はバゼットの羞恥をもてあそぶように言い、

「面白いものを見せてもらった。目が覚めたら、鏡に向かって懸命に百面相をしている女がいる」

　寝そべったまま片手をあげてみせた言峰が咽喉(のど)の奥で笑う。バゼットはどうしていいかわからず、ためらいがちに腕をおろした。言峰が笑っているのはバゼットの振舞いよりは狼狽(ろうばい)に対してだと判ってはいるが、頬の熱もおかしな態度もおさめられそうになかった。

「何をしていた」

「秘密」

バゼットは咄嗟に答えた。

「言い当ててほしいのか」

「遠慮します」

　恥ずかしさを隠したいがゆえに、バゼットは自分がどんどんひねくれていくのを感じた。自分の態度も思いも言峰の思惑どおりに進んでいるのは判っているが、逃げ道がない。言峰にはどうあがいても敵わず、むしろ敵わないと感じること自体がバゼットにとって幸福にすらなりはじめていたが、いいように追いつめられてしまうのはすこし口惜しかった。

　立っているのが落ち着かなくなり、バゼットはベッドに戻ると言峰の横に腰を下ろした。せめてもの抵抗にと背を向け、わざと言峰から見えるような角度で顔を背けた。窓の外には変わらず雄大な海が広がり、白い鳥が群れをなして悠々と空を横切ってゆき、その大きさに比べれば自分の意地など水の泡のように小さい。ただ単に、言峰から手を差し伸べて欲しいだけなのだとバゼットは知っていた。

「バゼット」

　揶揄するような言峰の声にバゼットは返事をせず、海を見つめるふりをしながら、神経は言峰の気配と思惑とを探っていた。きっとからかうような顔で見つめられているのだろう。

　風のような感触が首に触れ、それが言峰の手だとわかってもバゼットは海を見つづけた。言葉尻とはまるでちがう優しい手ざわりが首筋から頭へと移動し、バゼットの襟足をもてあそぶ。バゼットはくすぐったさと、身の底を這ってきた陶酔のような熱をじっと耐えた。小さな望みが叶った嬉しさに、バゼットは張っていた背をゆるめて自分から言いだす気になった。

「髪を伸ばそうかと思って」

「めずらしいことを言う」

　そう言って言峰はバゼットがやっていたように髪を抓む。痛いくらいの強さが心地よかった。

「誰を見た」

　言峰の指摘は真実を、そしてバゼットの胸をまっすぐに射た。

「わかりますか」

「おまえは影響されやすいからな。そうでなければ一時の思いつきにああまで熱心にはなるまい。どこぞの女優にでも憧れたか」